

収容、そして失明、失意のどん底に：

岡山県の離島にある長島愛生園。ここは全国に14カ所あるハンセン病療養所の一つ。当時約1800人の入所者がいた。収容される際にも、患者が乗る船と職員が乗る船は区分され、施設内でも、患者は立ち入る場所を制限されていた。

寮も少年寮、成年者寮、夫婦寮、障がい者寮など、島の中で細かく区分され、成年者寮などは12畳半の部屋に4、5人が同居し、プライバシーなど存在しなかった。そこでは、半強制的作業があり、牛舎、豚舎、鶏舎、果樹園、木工など、約60種の作業に従事させられた。

また、入所者には足や手、指を切断した人が少なくなかった。それは決してハンセン病そのものが原因ではない。体のどこかに知覚麻痺があるため、その部分の痛みを感じず、けがややけどをしても分からずに生活して

しまう。そして気が付いたときには、もう切斷しなければならぬ状態になるのだ。

「収容所の建物の中には、患者が設計し、建てたものもありました。意欲のあるものも多く、病気はあっても、誰もが生きる希望を持っていました」。

しかし、その収容から2カ月後、林さんに大きな事件が起こった。当時、視力は普通にあったにもかかわらず、試験薬を眼球注射され、光を失った。「入所当時は名前と呼んでもらっていましたが、失明してからは行動するのに人の手が必要になると、『おい』と呼ばれるようになりました」。

長男として生まれ、厳しくも愛情を持って育てられた林さん。「病気にかかり、親孝行もできず、目まで見えなくなると、自分はどうして生きていったらいいのだろう。親に申し訳ない」。自責の念にかられ、睡眠薬自殺を図ったが、未遂に終わった。「私は運がいいのか悪いのか

入所当時は名前で、失明してからは、『おい』と呼ばれました――



写真1 長島愛生園にある約3千人が眠る納骨堂。昭和9年に建てられ、現在のものは平成14年に新しく建設された。写真2 長島愛生園と本土をつなぐ邑久長島大橋。昭和63年に架けられ、ハンセン病事業の解放の象徴として「人間回復の橋」と銘打った。それはくしくもわが国の技術の粋を集めて完成した瀬戸大橋の完成と同じ年であった。

がっている。当時離島だった長島は、対岸との最短距離は約30m（現在は44m）だったが、満潮時には急流に豹変するため、泳いで逃げた人の多くは帰らぬ人となった。

この短い海峡が長島を社会から隔絶し、天然の要塞として入所者を隔離していたのである。

人間回復の橋、それは、人権回復の橋

昭和63年に架けられた「邑久長島大橋」。長さ135mの小さな橋だが、世界に比べて数十年の遅れをとっていたわが国のハンセン病事業の解放の象徴として、「人間回復の橋」と銘打った。



現在、盲導犬「ランブル」と一緒に外出もする林さん。講演では、「人間誰もが言葉に出せない夢を持っています。また、誰にも才能はあります。『ないと思うな夢と才能』と語った。

。それから2年間はただの肉の塊となってベッドに寝込んでいました」静かにそう語る。

壁を乗り越えなければ生きてはいかれない

「しかし、療養所の中、そしてその中でも重度障害者の寮にいても、人間の生きるチカラというものはあります」。そう林さんは強調する。

ある男性から励まされたことがとてもうれしかったという。その人は、林さんのもとに毎日来ては「いつでも代筆してやるから詩でも書いてらどうか」と勧めた。詩というものを知らなかったが、あまりに熱心に誘うので詩の勉強を始めた。漢字をほとんど知らなかったので、背中に入れてもらって理解した。そして、代筆して書いてもらった詩を投稿したところ、入

選。すると、代筆してくれた人も大喜びしてくれた。

「もちろん自分もうれしかったですが、自分が頑張ったことで、他の人も喜ぶ、みんなが幸せになれるというのを実感しました」。それから、もつとい詩を書きたいと勉強を続けた。「励ましてくれる人のために頑張ろうと、そして生きようと思いました」。

人が切ってくれた木の枝を杖に、夜病棟を抜け出して歩く練習をした。「何度杖を放り投げてもやめようかと思いましたが、泣きながらの練習でした」。しかし、「人間には壁がいくつもある。この壁を乗り越えていかなければ、生きてはいかれない」そう決意し、一歩一歩すり足で歩く練習をした。

現在、長島愛生園のある長島には橋が架けられ、本土とつな

しかし林さんは、「私はずっと人間です。あの橋は『人間回復』ではなく、『人権回復』の橋だと思っています」。

そして、長い長い戦いが実を結び、平成8年、「らい予防法」は廃止。自由を奪われた日々は、平成13年に補償金に変わった。しかし、奪われた日々は戻ってはいかない。

療養所で約45年間を過ごした林さん。平成14年に退所し、盲導犬と暮らし始めた。両手両足にまひが残るため、家事や外出も介護ヘルパーがいないとできない。しかし、毎日図書館へ行き、ボランティアの口述筆記で小説を書くことが生きがいに

なっているという。依頼があれば講演も行い、ボランティアやヘルパーの助けもあり、「毎日が幸せ」だと言い切る。

林さんは、幸せというものの定義についてこう語った。

「どんな状態であっても人間は生きてることが一番幸せではないでしょうか。少なくとも私はそう思っています。目が見えなくても、手や足が動かなくても、生きていればこそ。現在、多くの人に人に支えられて、今を幸せに生きています」。講演活動も活発に行う林さん。「二度とこんなことが繰り返されないよう、多くの人に伝えていきたい」と話してくれた。

なぜ、療養所に納骨堂が必要なのかを考えてください――

現在長島愛生園には、まだ230人が生活しています。高齢化が進み、平均年齢は84歳となりました。

何十年も園の中で生活し、高齢になった人が、一から新しい生活を踏み出せるでしょうか。また、病気の後遺症で、一見してそうだと分かるため、身内に迷惑が掛かることを恐れて帰れないのが大きな理由です。

ここに入所したらまず消毒から始まりました。クレゾールの入った消毒風呂に入れられました。そして、荷物は全て着ていた衣服と共にホルマリン消毒されました。

生身の人間が全身消毒される気持ちが想像できますか。なけなしのお金で買ってくれた新品の衣類も消毒で粉まみれにされ、付き添いの母が泣いていたのを今でも覚えています。

園内での結婚はできましたが、子どもを作らないという誓約が必要で、私が入る以前は男性は断種させられていたそうです。妊娠すれば中絶。それが条件でした。

夫婦寮も個室ではなく、2組が一部屋に同居。仕切りはカーテンのみ。プライバシーなどは存在しませんでした。

ここには約3千人が眠っている納骨堂があります。なぜ、療養所に納骨堂が必要なのでしょうか。その意味を考えてほしいと思っています。

毎年園内で十数人が亡くなっていますが、その遺骨すら引き取りを拒否されるケースが多く、骨になっても帰ることができないのです。

園内は一般に開放され、年間約1万人の見学者が訪れています。ここでの歴史を学び、自分の目で現実を見てください。そして、このような悲しいことが二度と繰り返されないことを強く祈っています。



長島愛生園 広島県人会 会長 (本人の希望により、匿名とさせていただきます)



ローソクの炎 ハンセン病元患者の心の軌跡 著者 林東植 発行 「ローソクの炎」編集委員会

施設に入所するまでのことを書いた手記。週5回、図書館に通い、口述筆記のボランティアの力を借り、12年かけて執筆。執筆は今も続いている。

ハンセン病を正しく理解してもらうための取り組みを進めています

全国に14あるハンセン病療養所に、いまだに23人の広島県出身者が入所されています。そのため、広島県では、入所者の訪問をはじめ、県民の皆さんにハンセン病を正しく理解していただくための啓発活動を行っています。

これまでに療養所の医師や看護師などでハンセン病にかかった職員は一人もいません。それだけ感染力が弱いにもかかわらず、間違っ

た認識が長い間続いてきました。人間は本能で、未知のものに対して過剰に恐れる傾向があります。それがいつの時代も差別や偏見を生み出す原因となっています。

毎年、さまざまな感染症が流行し、また現在、エボラ出血熱が世界中で注目されていますが、患者の人権が軽んじられることがないよう、正しい知識を持ってほしいと思います。



広島県感染症・疾病管理センターにしかわ・ひでき 西川 英樹主幹